銃後*1の生活と終戦の頃の私

大川　佐稚子

父の出征

北海道で陸軍大演習があったのは昭和11年の秋でした。お召列車をお迎えするために、全校生が池田町の利別川に近い線路の傍の芦原に整列して、何時間も立っていました。雨が肌までしみ通る程長い時間のあと、傘もささずに震えながら最敬礼をしている私達の前を、お召列車は通り過ぎていきました。私は小学校の三年生でした。

父は在郷軍人*2 でした。姉と私とが旭川の師団官舎で生まれたあと、軍人を辞めて学校の事務職員となり、函館に赴任し次いで池田の女学校に来たのでした。大演習のとき父は帯広での観閲式に馳せ参ずるために、何日も前から軍装一式を行李から出させて緊張しておりました。

翌年7月の盧溝橋事件*3 をきっかけに日本が出兵し、中国は戦場になりました。小学校の職員室にアジアの地図が貼られ、中国の各地に日の丸の旗が付けられました。日本軍が陥落させたということなのです。先生のお話しを聞いて「南京入城*4 バンザイ」「武漢三鎮*5 をやっつけた。日本は強い、バンザイ」などと喜んでおりました。日本軍が鬼が島で鬼退治でもしているのを聞くような、今思えば幼稚な子供だったと思います。

召集令状が来て、父は千人針を身につけて旭川に出発しました。千人針とは白又は黄色の布に千人の女性が一針ずつ縫い留め玉を赤糸でつけたもので、弾丸よけになるといわれ、出征廃止はそれを腹巻にするのです。穴あきの五銭と十銭銅貨が「死線を越えて、苦戦を越えて」の願いを託して縫いつけられました。寅年生まれと辰年生まれの女性は強運を持っているから、一針ではなく年齢の数だけ縫い留め玉をつけてもいいと言うのは、短時間に能率をあげるための知恵でありましょう。

旭川での学校生活

池田駅頭で父を見送った後、夏休みには私達家族も旭川へ移住しました。転校先の学校は軍人と軍属の子供だけが学んでいる学校で、私の学級は男女合わせて20数人の小規模校でした。父親の階級の高低如何で生徒に接する態度が違うことをはっきり見せている担任でした。地方から転校して来た貧しげな私。父は招集で来た下級主計将校。戦時中は軍人が絶対で、その階級も絶対でした。担任の目には見えていない透明人間のような私が、一度だけ大声で叱られたことがありました。それは日の丸弁当の時のことです。

「戦地の兵隊さんのご苦労に感謝し、毎月1日に質素なお弁当を持ってくること。贅沢をしては申し訳ありません。梅干し1個だけで御飯をたべよう。日の丸弁当にしよう。」との先生のお話しです。その日は屋内運動場に整列して座り、全学年の会食となりました。各担当は一人一人のお弁当を点検して歩き、私のところまで来ました。「なぜ日の丸ではないんだ、お前だけなぜ日の丸ではないんだ」大声で私をにらんでいるのです。質素に、ということで母はあり合わせの漬物をお弁当の隅に添えてくれたのでした。梅干しは私の家ではお金を出さなければ手に入りません。より質素な漬物がなぜ叱られるのか。みんなと違うことがなぜ叱られるのか。戦地の兵隊さんのご苦労を偲ぶことにはならないのか。私はおどおどして目の前が何も見えなくなりながら、同じ漬物のお弁当の弟も叱られているのかと心配でなりま

せんでした。
やがて父の転勤に伴われて札幌に移住しました。

戦中の女学校

昭和 16 年 12 月、真珠湾攻撃*6 のニュースを聞きました。日本軍は東南アジア一帯にも広く進攻し、大本営発表によると赫々たる戦果を挙げているということでした。女学校では敵国の言葉を勉強してはならない、という命令により英語の授業がなくなり、ドイツ語に切り替わりました。１年くらいたってドイツが連合軍に降伏したから、ドイツ語もいけないことになり、救急看護の授業となり、ドイツ人の修道女の先生から包帯の巻き方や三角巾の使い方を教わりました。しかしその授業すら勤労奉仕や援農のためにとりやめになることが多かったのです。

ある日の訓話である先生が「水を飲みたくても水の不自由な戦地の兵隊さんを思って、みなさんが水を飲むときは、半分だけ飲んで残りの半分を捧げましょう」と言われました。捧げるとはどういうことなのでしょうか。私が水を半分残したところで、戦場の兵隊さんの喉がうるおうわけではない。何日か考えて、これは陰膳のようなものだと気がつきました。池田にいた頃、父が池田駅をバンザイの声に送られて出征して以来、母は父の写真を朝夕お膳を供えていました。

水が無くて苦しんだ兵隊さんの話しを思い出しました。旭川にいた頃、ある学校にノモンハンでの戦い*7 で片腕を失った先生が着任しました。昭和 14 年の初夏、満蒙国境の出来事です。草原の彼方から次々にあらわれるソ連軍の戦車に、「肉弾」の文字さながら日本兵は素手で立ち向かうかのような先生のお話しでした。昼間は暑く夜は寒い。灼けつくような炎天下、飲み水がありません。激しい戦いに疲労困憊し、草の葉についた夜露を口にしようとして四つん這いになり「この姿はまるで馬だ、けものだ」と思い、「人間でありたい」と痛切に思ったそうです。ソ連の戦車から噴き出す銃火を浴び、重いキャタピラの下敷きになり、故国から遠く離れた草原で死んでゆく兵隊さんは、最期の水の一滴もくちにすることができなかったのです。先生が白い手袋をはめた義手のいわれを話されたとき、どれ程苦しい戦いであったかと、私は涙が止まりませんでした。

女学校では机に向かってノートを開いて、という勉強が全くできなくなりました。東京方面から戦禍を逃れて何人も転校して来ました。女の人が市電を運転し、庁立高女や市立高女の生徒が車掌をしていました。

中学生も少年航空兵や予科練修生を志願するように奨められていました。15 歳くらいの少年なのです。出撃の前に一度故郷に帰されるのだそうで、うちの近所でもその少年を見たことがあります。丈の短いぴったりした白い上着に七つ釦が光り、折り目のはっきりした純白のズボン。衣料品の不足している一般人の目には眩しいような美しさです。母に言うと母は苦しそうな厳しい顔をして見ようとはしませんでした。いずれうちの子もあのようにして召し出されると思うのか、あの純白は死装束だと思おうのか。母には何か言いたいことがあっても、それを言うまいとしているようでした。

「壁に耳あり」という標語は、どこで誰が聞いていないとも限らない。へたなことを言って立場が危うくなってはいけないから何も言うな、という戒めでした。敵のスパイに情報の届くことを恐れるよりも、厭戦的な言葉や、軍や政府を批判するような言葉を言わせないために、国民相互が監視し合うような標語だったと、今思います。

庭先に穴を掘って防空壕にし、女学校のテニスコートにも防空壕が掘られて避難訓練が行われました。防空演習ではバケツに水を入れて手送りして運び、火を消す訓練をしました。家々の窓ガラスには細かく切った紙が斜め十字に貼られ、敵の飛行機の爆弾が炸裂してもガラスが飛び散らないようにしました。綿入れの防空頭巾を背負って通学しました。靴が無いので下駄履きです。白い服は敵の飛行機から目につきやすいからと、夏の制服を玉葱の皮を煮た汁で枯草色に染めました。（後で広島に落ちた新型爆弾は色ものの方が危険だ、やはり白の方がいい、ということになりましたが、一度染めたら元に戻りません）

各家庭に長い柄の突破器というものが配られました。先端に鉄の鉤がついているのです。空襲で火事になったら、延焼を防ぐために家を破壊せよ、という命令です。札幌の西創成小学校から薄野を通って豊平橋に向かう道路を空襲に備えて拡幅するために、家々が強制的に壊されました。これはただごとではない情景でした。日本の前途がひどく暗いものに感じられ、しかしそれを言っても、思ってもならないと、自分で自分を叱り、励ましておりました。大陸や南方の戦線すべて日本軍が優勢という大本営の発表でしたが。

勤労奉仕の日々

しかし、とうとう「玉砕」の言葉がきかれるようになりました。アッツ島*8 に上陸していた日本軍が全滅したのです。「玉砕」という言葉は字づらは美しいけれど、そこにはどれだけの苦しい戦いがあったことか。故国から離れたアリューシャン列島の一小島で、苦しい苦しい戦闘をして亡くなった将兵の「死」なのです。

慰霊祭が中島公園でありました。広い祭壇が雨に濡れていました。地図を見ると広い太平洋の北部にアリューシャンと千島列島は緩い弧を描き、更に北海道、本州から四国、九州、琉球列島へと宝石の首飾りのように美しく連なっているのに、平和ではないのです。慰霊祭での歌は「やいばも凍る北海の…」いや「酷寒の」だったかもしれません。悲しいメロディでした。「御楯となりて」という歌詞もありました。アッツ島のあと幾度か玉砕の大本営発表があり、その発表のときのラジオから流れる曲が「海ゆかば」でした。「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、かへりみはせじ…」

丘珠の飛行場に勤労奉仕に行きました。札幌市内の各女学校の生徒が来ていた、二人一組で土を盛ったモッコに丸太棒を通して担ぐ作業です。飛行場とは名のみ、１機も見当たらず、飛行機の形をした木製の物が一つ置いてありました。街には「欲しがりません勝つまでは」とか「一億一心百億貯蓄」などの標語のほか「来はあれど飛行なきをいかにせん」という悲痛な標語が貼ってありました。もう日本にはまともに飛ぶ飛行機がなかったのかもしれません。何年か前、家庭にある金属製のものを、アルミの弁当箱まで供出したのでした。飛行機や武器を造るために。

私達の女学校の屋内運動場は陸軍の被服工場になりました。ここでは兵隊さんのジュハンとコシタと呼ばれる下着を裁断から縫製、仕上げの全工程をしました。私の仕事は縫製で、何十台もミシンの並んだ薄暗い運動場で、来る日も来る日もミシンを踏み続けました。目を酷使したと今になって思います。みんな一心不乱に縫い続けました。革の長靴を高く鳴らしながら学校工場内を歩きまわる監督官の大尉は「聖戦完遂の為、鬼畜米英に勝つ為に、更に作業能率を上げよ」と激しい口調で訓示するのでした。

終　戦

そして昭和 20 年 8 月 15 日を迎えました。翌日教室で体育の先生が「もう学校工場をしなくてもよくなりました」と言って、黒板に顔を押し当てて号泣しました。丘珠の作業のとき、共に土運びをした女の先生でした。

銃後を守る私もがんばらなければと思って 1 日に 30 枚のジュハンを縫うことを自分に課してきた私は、明日から何をしたらいいのでしょう。個人としての感受性も思考も遠くへ追い払い、ひたすら「聖戦完遂のための縫製作業」に向かって頭の中や手足を動かし、疲れ果てて家へ帰るだけの生活をしていた私が、新しい世の中が来たと言い聞かされても、そう器用に切り替えることができませんでした。絶対に正しいと言うことも、確実なこともないのだ、信じられるものはないのだと思いました。生活の苦しさだけが確かな現実でした。あらゆる生活物資が不足し、母の着物を解いて縫ったモンペを持って、月寒や長沼の農家にお米を買いに行きました。苦労して背負って来た一斗の米を、列車内や駅で取り締りの人に取り上げられたこともありました。まるで強盗に会ったような気持でした。街中を走る電車はいつも満員で、閉まらないドアには人々がはみ出すようにしてしがみついていました。駅前通りの建物のうす暗がりにお化粧の濃い女の人が、米兵にかん高い声で呼びかけていました。みんな生きていくに必死でした。

電力が不足しているので、電球の中の細い線が絹糸のように赤くなるだけの暗い夜が続きました。ローソク送電、線香送電などと言いました。勉強をしたい弟は近くの変電所の外に立って、窓の明かりで教科書やノートを読んでいました。私は母と共に南瓜やお米の買い出しに行ったり、配給の行列に並んで、食べてゆくことを分担しました。終戦の時私は 17 歳でした。

終戦の日、私の人生も終わったように感じましたが、戦死した若者たちのことを思うと、彼らに私の生き方を問われているのを感じます。還ることのできない特攻機*9 で飛び立った少年飛行兵、大陸の土になった将兵、南海の孤島で餓死した将兵、爆弾や空襲のために亡くなった人々、望みもしないのに自国が戦場となり、生活が壊され家族が離散し命を落としたアジア諸国の人々。どの死も「戦争によって人生の可能性を途中で断ち切られた死」なのです。その人々が生き残った私達に問いかけているのです。世の中がどうであるべきか、私はどう生きるかを。

どんなに美辞麗句で飾り、豪華な祭祀をしても、戦争のない平和な世の中を持続させない限り、死んだ人々は安らかに眠ることができません。

（おおかわ　さちこ　昭和 3 年生まれ）

*1　**銃後**　戦場の後方。戦場になっていない国内又は戦闘行為に直接加わらない一般国民のこと。

*2　**在郷軍人**　平時は民間にあって生業につき、非常の際に必要に応じて招集され国防にあたる予備役、退役などの軍人のこと。

*3　**盧溝橋事件**　日中戦争の発端となった北京郊外の盧溝橋付近で起こった日中両軍の交戦事件。昭和 12 年 7 月 7 日夜、夜間演習中の日本軍の一中隊に銃弾が撃ち込まれたとして、日本軍側が軍事行動を起こし、中学軍側と順次衝突に至った。

*4　**南京入城**　昭和 12 年 12 月 13 日、日本軍は中華民国の首都であった南京を占領し、その際日本軍による中国兵や一般市民の大虐殺が行われた。

*5　**武漢三鎮**　中国の地名。三鎮は、武昌、漢口、漢陽の３地区の総称。武漢三鎮占領は、昭和 13 年 10 月 27 日。

*6　**真珠湾攻撃**　昭和 16 年 12 月 8 日、千島列島エトロフ島単冠湾に集結した日本海軍の空母 6 隻を含む 33 隻の大機動部隊は、ハワイ・オアフ島真珠湾の米国太平洋艦隊の主力部隊を奇襲攻撃し、アメリカ、イギリスに宣戦布告した

*7　**ノモンハンでの戦い**　ノモンハン事件。昭和 14 年、満蒙国境のノモンハンでおこった日ソの紛争。領土権をめぐり国境紛争が頻発していたが、ついに外蒙軍の侵入を口実に攻撃を開始し、３か月の激戦ののち、ソ連の優秀な機械化部隊のため日本軍は壊滅状態になった。以後日本は、軍の機械化に打ち込んだ。

*8　**アッツ島**　アリューシャン列島のアッツ島には、北海道の第七師団から分派された２６３８名の守備隊がいたが、昭和 18 年 5 月 20 日大本営は、アメリカ艦隊に包囲されたアッツ島への増援計画を断念し、アッツ、キスカ両島の放棄を決定した。負傷して捕虜となった 29 名を除く全員が戦死または自決した。同年 5 月 30 日大本営は、アッツ島守備隊が「玉砕」したと発表した。

*9　**特攻機**　特別攻撃隊員が搭乗した飛行機。特別攻撃隊は、太平洋戦争中爆弾を積んだ飛行機などで体当たり攻撃を行った部隊で、昭和 19 年 10 月 25 日、レイテ沖海戦で海軍の組織した「神風（しんぷう）特別攻撃隊」が先駆けとなった。